一これをものにし、他校を恐れさせた男がいる。昭和六十二（一九八七）年の学生九五kg級チャンピオン、新垣修である。新垣ははじめ寝技への連絡技としてこれを練習していたのだが、ついにはこの技で「一本」「技有り」がとれるようになった。技の性質上、「一本」につながるような技のプレッシャーは他の技のそれとはたしかに異なる。試合の相手が恐れるのは分るというものだ。

六十二年の彼は準決勝戦、拓大岩村選手をカニバサミ「技有り」から横四方固め、決勝戦は東海大甲斐選手をカニバサミ「一本」で仕留めた。

新垣は鬼ッ子技に市民権を与えたのである。彼の技について少しいえば、本来カニバサミが飛び出すはずのない間合や組手から仕かけられるところに彼ならではのものがあった。たとえば、正面から組みあっている時、組みぎわ、また、内股や払腰からの変化などで、型にはまったこの技の攻めの間口を広げたのである。正面からかけるといっても体を捨てる瞬間は相手の真横に位置しているのだから、その俊敏な体さばきは稽古の賜であろう。

東海大の甲斐を寝技に引き込む新垣

第35回全日本学生柔道優勝大会

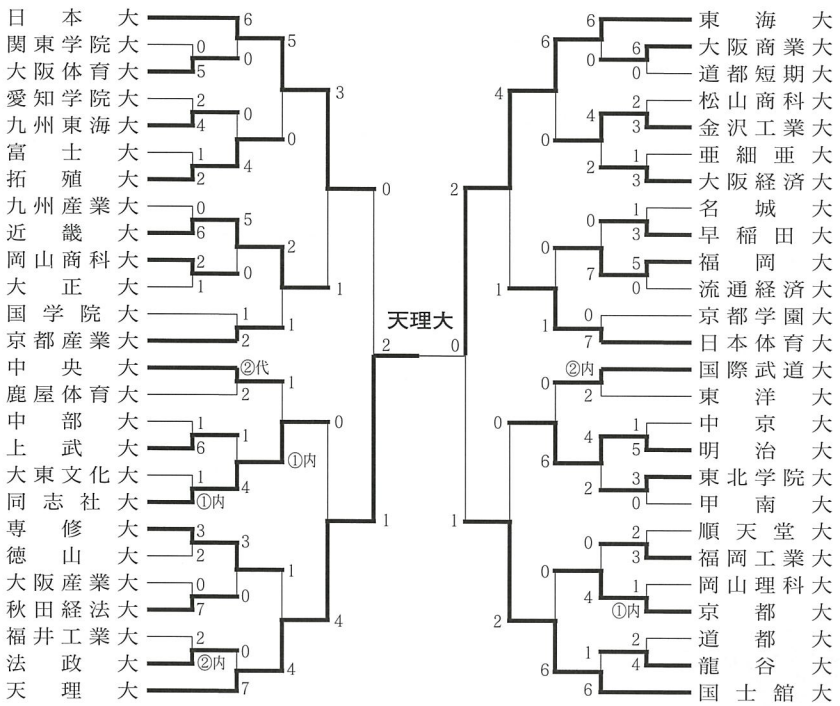
6月28・29日　日本武道館

準々決勝で消える低迷抜け出せず

〔準々決勝戦〕

国士舘大学　2―0　明治大学

優勝　天理大学



初戦の中京大に5対1、次の東北学院大に4対2で勝ち、準々決勝で国際武道大に6対0と圧勝したが、上位校の壁は厚く、国士舘大に2対5で敗れる

第38回全日本学生柔道選手権大会

11月9日　大阪中央体育館

朗報！　一年生小川、学生チャンピオンに

低迷が続いている柔道部に漸く光がさした。一年生の小川直也（八王子高校出）が学生選手権（無差別）を獲得したのである。

小川は一九二cm、一三〇kgの体格を利して決勝までの七試合を力感あふれる柔道であばれまわった。決勝の相手関根は身長、体重ともほぼ小川と互角、ともによく攻めあったが決め手なく、判定となり、積極性にまさった小川に旗が上った。

一年生のこの勝利を明大柔道部復活の号砲としたい。

〔準決勝戦〕

小川直也（明大）　優勢勝　中川正彦（国際武道大）

関根英之（東海大）　合せ技　野村幸生（天理大）

〔決勝戦〕

小川直也（明大）　優勢勝　関根英之（東海大）

第9回世界学生柔道選手権大会
12月　ブラジル・サンパウロ

小川三位（無差別級）

全日本選手権大会出場者
藤原敬生（準優勝）、檀上治享

明大の技
小川直也の支釣込足

小川が明治に入り一年生の秋、いきなり全日本学生選手権大会（無差別）に優勝した。

まだロクに技を知らない小川が！　と周りはおどろいたのだが、事実この大会で小川が見せた技は支釣込足、大外刈、小外掛、の三技。ただし攻めは、〝超〟アグレッシブなものだった。後に黄金の左、といわれる左の引きつけからの大外―釣込足、またその逆の連絡で勝ち上って行き、気がついて見れば決勝に進んでいたという事である。

小川の技はよくマサカリに例えられる。技の切れではなく破壊力ということなのだろうが、だからといってこの階級の選手に往々にして見られる鈍重さとは無縁であった。自分の型になると攻めまくる攻撃柔道である。

本当に身についた得意技なら、一つあれば十分という見方もあろうが、新人の小川にそこまでの自信はなかった筈だ。ともあれ、その小川がその後次々と新しい技に挑み、自分の技としていく早さに皆、目を見はったものである。

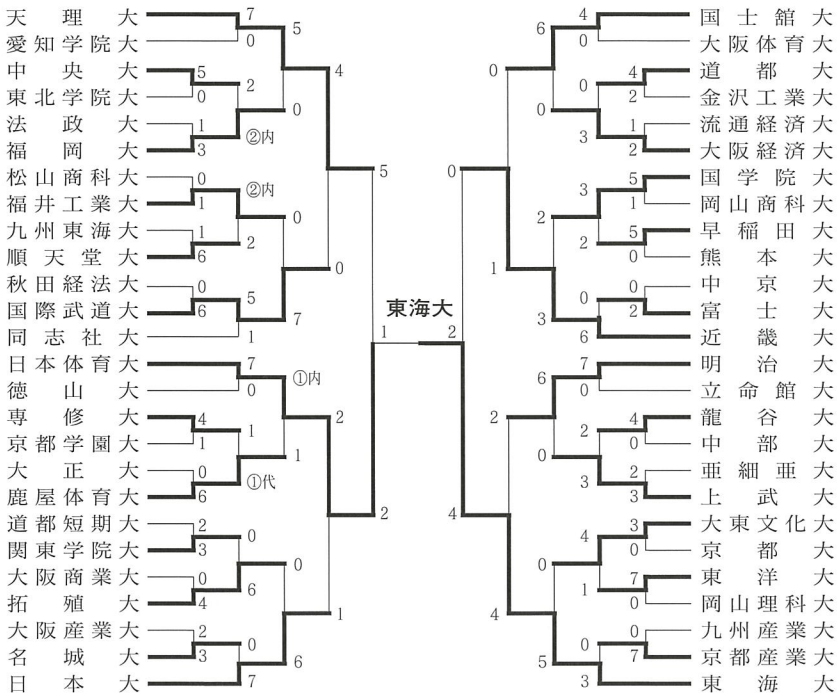
以後の活躍については列記するまでもないが、世界四回、全日本七回優勝というキャリアもさることながら、特筆したいのはその勝ち内容、すなわち一本勝ちの圧倒的な多さである。かつて三つしか技が出来ないと陰口をたたかれた小川がその後の大舞台で見せた決り技の多彩さはどうだろうか。大外刈、大内刈、支釣込足、小外掛、内股、払腰、体落、腰車、足車そして寝技、etc。多分に異論はあろうが、マサカリ小川は業師だったとあえていいたい。

さて、本題、小川の支釣込足について書く、この説明はまことに短い。「小川の支釣込足はモーター付の石臼だ」とある選手がいっていた。いい得て妙、この例えがすべてをいい表している。無細工な石臼の仕事も円運動から成っている。柔道をやっている者ならこの感じがわかるはずだ。終りに故神永昭夫が「ヘーシンクの釣込足があんな感じだった」といっていたことを付記しておく。

東海大の関根に支釣込足をかける小川

第36回全日本学生柔道優勝大会
6月27・28日　日本武道館

準々決勝の壁、またも破れず



準々決勝で優勝した東海大と対戦。先鋒・新垣が小内刈で有効をとられ、次鋒・天本も指導から注意をとられて負け。飛松（和）が背負投げ、小川が東海大ナンバーワンの多田隈に注意勝ちするが、結局4対2で敗れる

優秀選手（関係分）
明治大学　飛松和雄

大会を顧みて

姿　節雄

今年は原助監督の平素の厳しい稽古指導で相当の成果をあげること、期待して居たが残念ながら東海大学に準々決勝で二対四で敗退してしまった。内容的には相当伯仲した熱戦であったが七人の団体試合で先鋒、次鋒と二点先取されては敗れても仕方なかった。三番手出場の飛松（弟）は昨年九月の東京学生体重別選手権大会で松岡（東海）に「カニ挟」で足首骨折し漸く稽古を始めたばかりであったが、村上（東海）を豪快な背負投で一矢をむくいてくれたのは見事であった。大将に出場の飛松（兄）吉田（東海）の「カニ挟」に足首をねんざ、倒れたのは不運であった。彼も足首の手術が漸く治ったところ又のねんざで残念なことである。

この「カニ挟」の防禦は両手で早く組み勝つことで、片手だけ捕って半身にならぬことが肝要であるが、投技の効果のない相手に危害を加える技は禁止技とするか反則負にする必要があると痛感する。

小川、奥襟をとって内股、大外、払腰と攻める。金野守勢のまま後半に入る。金野の蟹挟がすっぽ抜けたところを小川上四方固で抑込むが八秒で解ける。時間となり終始優勢に戦った小川に旗が上がる。

86kg超級

二位　飛松和雄

第15回世界柔道選手権大会
11月21日　西ドイツ・エッセン

小川、世界チャンピオンに

無差別級

〔二回戦〕

小川　優勢　カストロ（キューバ）

〔三回戦〕

小川　優勢　デルコロンボ（フランス）

〔準決勝〕

小川　合せ技　ビクタチェフ（ソ連）

〔決勝〕

小川　優勢　ゴードン（イギリス）

十一月（二十日～二十二日）西ドイツ・エッセンで開催された世界柔道選手権大会で、明大柔道部二年小川直也三段が、無差別級に優勝した。小川は、九月の全日本体重別選手権大会九五kg超級に優勝して急拠強化指定選手に選ばれた文字通りのルーキーながら、本命視されていた正木選手不調の穴を見事に埋め、大会に無差別級が定められて以来、日本柔道が保持して来たこの級のタイトルを守りきった。

明大から世界選手権大会オリンピックのチャンピオンが出たのは、モントリオール五輪で上村春樹が無差別級の優勝を飾って以来の事で、今回の金メダルは、第二回大会重量級優勝の曽根康治から数えて丁度十個目。この十個のメダルの中で、世界選手権大会（六回、七回大会）に連勝した、篠巻政利、第七回大会とミュンヘン五輪軽量級に優勝した川口孝夫（四十七年度）、同じく第七回大会と、モントリオール五輪の無差別級に優勝した上村春樹の活躍が特筆されるが、弱冠十九歳の小川の活躍もこれに劣らない。

第6回全日本学生柔道体重別選手権大会
10月3・4日　日本武道館

明治浮上、三階級を制す

〔決勝戦〕

71kg級

天本文雄（明大）　優勢勝　手嶋（鹿屋体大）

一進一退で迎えた終盤、天本思い切って大外刈に行けば手嶋横倒れとなる。判定は天本に。

95kg級

新垣　修（明大）　腕挫上字固　甲斐康浩（東海大）

開始早々新垣得意の蟹挟に行けばタイミングよく決って有効、新垣はこの機を逃さず甲斐の腕を十字固にきめて優勝。

95kg超級

小川直也（明大）　優勢勝　金野　潤（日大）

第37回全日本学生柔道優勝大会
6月25・26日　日本武道館

上位グループの力戻る

〔準決勝戦〕

東海大学　1―1　近畿大学
（代表戦）

天理大学　2―1　明治大学

奥林洋樹　引　分　岡部善隆
中谷　弘　引　分　石田輝也
鳥居啓治○　優勢勝　吉田秀彦
中村修士　送襟締　○小川直也
安藤　弥○　大外刈　天本文雄
徳田真三　引　分　飛松和雄
中林千春　引　分　飛松秀樹

〔決勝戦〕

天理大学　2―1　東海大学

〔決勝戦〕

飛松和雄（明大）　優勢勝　合瀬勝彦（鹿屋体大）

決勝、準決勝は優勢勝だったが内容的には問題なく、随所に得意の背負投のキレを見せる余裕の優勝だった。

第7回全日本学生体重別選手権大会
10月8・9日　日本武道館

個人レベルは完全復活 今年も三階級に勝つ

〔準決勝戦〕

78kg級

吉田秀彦（明大）　優勢勝　小久保純史（日体大）
船渡敏夫（近大）　優勢勝　近藤克幸（鹿屋体大）

〔決勝戦〕

吉田秀彦（明大）　縦四方固　船渡敏夫（近大）

一年生の吉田は危なげなく勝ち上り決勝戦も難なく制して大物新人の片鱗を見せた。

〔準決勝戦〕

95kg級

飛松和雄（明大）　優勢勝　柳　英幸（国際武大）
合瀬勝彦（鹿屋体大）　優勢勝　児玉　篤（筑波大）

〔準決勝戦〕

95kg超級

小川直也（明大）　技有り　中林千春（天理大）
関根英之（東海大）　合せ技　鳥居啓治（天理大）

〔決勝戦〕

小川直也（明大）　技有り　関根英之（東海大）

先手、先手と攻めるのが小川の魅力であるが、安定度も高まっている。決勝、準決勝はともに技有りの勝ちだったが相手を寄せつけない堂々とした試合態度であった。

71kg級

三位　天本文雄

86kg級

三位　石田輝也

95kg級優勝の飛松和雄

全日本学生柔道選手権大会（無差別）
10月30日　大阪中央体育館

小川連覇

全国七十九名の選手が出場して行われ、小川（明大）が全試合一本勝ちの圧倒的強さを発揮して優勝した。なお決勝戦は相手の岡田選手が準決勝戦で痛めた膝の怪我のため試合を続けることが出来なくなり棄権したため戦わずしての一本勝ちであった。

〔準決勝戦〕
小川直也（明大）　大外刈　森成寿（近大）
岡田弘隆（筑波大）　優勢勝　山崎茂樹（近大）

〔決勝戦〕
小川直也（明大）　棄権　岡田弘隆（筑波大）

世界大学柔道選手権大会
12月17～21日　グルジア共和国・トビリシ市

小川、吉田優勝、飛松三位

本大会出場の明大勢は三名。それぞれ期待に応える結果を出した。
なお、本大会日本チームの金は三に留まり、ソ連の五を下回った。日本のあと一つは古賀稔彦（日体大）が獲得した。

〔準決勝戦〕
95kg級
小川直也（明大）　横四方固　プラーデ（西ドイツ）
マソネット（フランス）　払腰　リヒター（東ドイツ）

〔決勝戦〕
小川直也（明大）　払巻込　マソネット（フランス）

〔準決勝戦〕
78kg級
吉田秀彦（明大）　有効　イブラヂモフ（ソ連）
ムスケン（フランス）　技有り　ボード（オランダ）

〔決勝戦〕
吉田秀彦（明大）　小内刈　ムスケン（フランス）

〔三位決定戦〕
95kg級
飛松和雄（明大）　有効　ダグラス（ブラジル）

全試合鮮かな一本勝、小川の力は突出していた。十月に全日本学生を制した一年生の吉田、余勢をかって世界学生の頂点に立つ快挙をなし遂げた。

全日本選手権大会出場者
藤原敬生、藤戸優治、小川直也、吉田秀彦

第38回全日本学生柔道優勝大会
6月24・25日　日本武道館

準優勝、復活目前

〔準決勝戦〕

明治大学　2―2　天理大学
（代表戦）

秀島大介　引　分　養父直人
石田輝也　引　分　安藤　弥
岡部善隆　引　分　岡崎裕史
小川直也○　合　技　小林広幸
岡田彰久　合　技　○徳田真三
吉田秀彦○　合　技　鳥居啓治
甲斐　親　払巻込　○中谷　弘

〔代表戦〕

小川直也○　横四方固　中谷　弘

明治は代表戦の結果、十六年ぶりに決勝へ進出。先鋒から五将まで引分が続き中堅戦を迎えた。ポイントゲッター小川、小林を釣込足の技有りから寝技に引き込み一本、明治先行。続く三将戦挽回を期す天理徳田の気迫が勝り片襟背負技有り二発をきめられ岡田沈む。副将戦、明治は七八kg級の吉田、対する天理の鳥居は一二〇kgの重量級、しかし吉田はその体格差を物ともせず、奥襟を引きつけて相手の首を殺し、内股、大内、小内と攻め込み、先ず内股技有り、間髪を入れず小内刈を飛ばせばこれも技有りとなり快勝。大将戦甲斐が敗れ同点で試合終了。

代表戦、明治は小川、天理は中谷のエース同士の対戦、小川中谷の何回目かの払巻きをつぶして寝技に持ち込み横四方に固めて一本。

東海大学　3―0　近畿大学

〔決勝戦〕

東海大学　1―1　明治大学
（内容負）

甲斐康浩　引　分　石田輝也
中村佳央　優勢勝　○岡部善隆
下出善紀○　十字固　甲斐　親
関根英之　引　分　小川直也
山田利彦　引　分　大滝賢司
後藤竜二　引　分　吉田秀彦
佐藤茂士　引　分　秀島大介

先鋒引分の後、次鋒岡部、中村戦左右のケンカ四つで引手の取り合いとなる。岡部組み勝った一瞬をとらえて左の払腰に行けば有効となる。続く五将戦、東海下出は長身選手、逆に甲斐は一六五cmの短躯、下出は長身を利して肩越に腕をまたぎ腕挫十字固に入ればきまる。その後中堅戦では両校のポイントゲッター、小川と関根の対戦となったが小川の攻めを関根が守り切って引分。以後、三試合は引分に終り、残念ながら十六年ぶりの優勝は成らなかった。

優秀選手（明大分）　小川直也、吉田秀彦

第8回全日本学生体重別選手権大会
10月7日　日本武道館

〔決勝戦〕

78kg級

吉田秀彦（明大）　小外掛　孝富士徳幸（明大）

同門の対決。吉田は左、孝富士は右、両者技が出ず「教育的指導」。中盤、先輩孝富士が奥襟を取って内股を狙えば後輩の吉田が裏

投ぎみに入って一本勝ち。吉田が二連覇。

全日本柔道選手権大会
4月29日　日本武道館

学生小川、天皇杯に輝く

〔準決勝戦〕

小川直也（明大）　小外刈　山本旗六

関根英之（東海大）　優勢勝　渡辺直勇

〔決勝戦〕

小川直也（明大）　横四方固　関根英之（東海大）

小川直也の決勝の相手は東海大学四年生の関根選手、史上初の学生対決となった。

中盤、小川、自分の組手になった瞬間、前につぶすように崩して内股に入れば関根倒れる。関根、伏して小川の寝技をのがれようとするが、小川帯を取って強引に裏がえしにして抑え込んだ。三分二十秒。

全日本選手権大会出場者

小川直也

第16回世界柔道選手権大会
11月10日　ユーゴスラビア

小川直也、世界連覇

明治大学柔道部主将、小川直也五段が全試合一本勝ちという圧倒的な強さで、九五kg超級、無差別級の二階級を制覇。二冠達成は八一年、オランダ大会の山下選手以来史上二人目、無差別級の優勝は前回の西ドイツ大会に続くもので、世界選手権無差別級の二連覇は七一年の篠巻政利以来十八年ぶりの快挙。

無差別級決勝戦で、一四〇kg、小川より十五kgも重い巨漢ソ連のキボルトザリゼ選手を小川が一瞬のスキをついて崩れ上四方固。完勝。初日の九五kg超級に続く金メダル。

〔二回戦〕

小川直也（日本明大）　体落　チアホン（韓国）

〔三回戦〕

小川直也　谷落　ラシュワン（エジプト）

〔準決勝戦〕

小川直也　合技　ヴィエトリ（イタリア）

〔決勝戦〕

小川直也　崩横四方固　モレノ（キューバ）

無差別級

〔二回戦〕

小川直也　大外刈　グローベン（西ドイツ）

〔三回戦〕

小川直也　合技　モレノ（キューバ）

〔準決勝戦〕

小川直也　内股　キム（韓国）

〔決勝戦〕

小川直也　上四方固　ギボルトザリゼ（ソ連）

全日本ジュニア体重別選手権大会
9月24日　講道館

71kg級

優勝　秀島大介（明大）

第39回全日本学生柔道優勝大会
6月23・24日　日本武道館

届かず！　同点内容負け

〔準々決勝戦〕
明治大学　2―0　筑波大学
近畿大学　4―0　福岡大学
天理大学　5―1　日体大学
東海大学　2―0　日本大学

〔準決勝戦〕
近畿大学　1―1（内容負）　明治大学
東海大学　3―1　天理大学

〔決勝戦〕
東海大学　3―2　近畿大学

優秀選手（関係分）
明治大学　吉田秀彦

第9回全日本学生体重別選手権大会
10月6・7日　日本武道館

優勝　石田、吉田

〔準決勝戦〕
78kg級
吉田秀彦（明大）　内股　本田勝義
小久保純史（日体大）　優勢勝　富岡範光

〔決勝戦〕
吉田秀彦（明大）　優勢勝　小久保純史（日体大）

〔準決勝戦〕
86kg級
石田輝也（明大）　背負投　正田竜一（日体大）
山本旗六（日大）　横四方固　中橋政彦（天理大）

〔決勝戦〕
石田輝也（明大）　優勢勝　山本旗六（日大）

71kg級
二位　秀島大介

95kg超級
三位　岡部善隆

全日本学生柔道選手権大会（個人、無差別）
11月10日　大阪府立体育館

大瀧準優勝

〔決勝戦〕
三谷浩一郎（近大）　優勢勝　大瀧賢司（明大）

全日本柔道選手権大会
4月29日　日本武道館

小川連覇

〔準決勝戦〕
小川直也（明大）　優勢勝　金野潤（日大）

古賀稔彦（日体大）　優勢勝　三谷浩一郎（近　大）

〔決勝戦〕

小川直也（明　大）　足　車　古賀稔彦（日体大）

小川、平成の古賀の動きにのらず深追いをしない。古賀もまた引きつけられての不利は十分わかっているから得意の背負、小内も間合いが遠く小川をあわてさせるところまではいかない。結局体格、体力の差は如何ともし難く七分すぎ動きをとめられ勝負が決った。

全日本選手権大会出場者

小川直也

嘉納杯国際柔道選手権大会

11月3日　日本武道館

無差別級

優勝　小川直也（明大）

95kg超級

優勝　小川直也（明大）

78kg級

優勝　吉田秀彦（明大）

71kg級

二位　秀島大介（明大）

世界学生柔道選手権大会

12月12～16日　ベルギー・ブリュッセル市

78kg級

優勝　吉田秀彦（明大）

吉田の決勝の相手キム（韓国）は世界チャンピオン、得意技は内股、しかし吉田の内股の方が勝り二分すぎ型のように左内股が決る。

明大の技
石田輝也の袖釣込腰

石田は得意技が多い。得意技が多いというのは妙ないい方だが、相手のタイプに対応できる技をもっているという事である。

左技の選手であるが右にも袖釣込腰と一本背負がある。種々な技のなかで左組手から一転して右へかつぐ袖釣りは石田の技の中でもっとも華やかで絵になる技だ。

簡単に解説して見る。（共に左組み）相手が自分の右前方へ動く瞬間をとらえ、前に出ている左足を軸に体を右へ回転させてかつぐ、崩しの方向は多少ちがうが足のさばきは大車や払腰の場合と似ている。

腰の回転を生かす技であるから右足を相手の右前に深くふみ込まないようにする。したがって間合いが十分にとれる。腰を密着させて引っこ抜くように掛ける釣込腰とはタイプが大きく異なるところに注意。小さなモーションで素早く左組から右へ腰を入れかえるのである。腕の動作はそれまで引き手だった右を、相手の前腕を自分の拳の上に乗せるように握りかえて引きつける。逆に引き手に変わった左は前襟を出来るだけ深く握り、やはり強く引きつける。

以上の動作を瞬間的に完了させ足腰の動きに対応させるのが石田の技である。

次のパターンが試合でよく見せる流れである。相手の前袖をしぼって釣り手をあたえない。なおも強引にふみ込んで釣り手をとりにくる瞬間、力を抜いて相手の力をそらし、その一瞬体をさばいて宙に舞わせるというもの、美技である。

第40回全日本学生柔道優勝大会

6月29・30日　日本武道館

明治遂に復活

校歌武道館に鳴り響く

日本学生柔道連盟の四十周年を記念して、オープン参加となった今大会には百四十校が出場し、白熱した試合を展開した。

大会二日目勝ち残った十六校によって大熱戦が展開され、明治、東海、天理、近畿の四強が準決勝戦に進んだ。

準決勝、明治対近畿、天理対東海は共に点の取り合いのまさに手に汗を握る大激戦となり結果、決勝戦への切符を手に入れたのは明治大学と東海大学であった。

〔五回戦〕

明治大学　3―0　国際武道大学
近畿大学　4―1　順天堂大学
日本体育大学　5―0　鹿屋体育大学
福岡大学　5―0　京都産業大学
天理大学　6―0　国学院大学
日本大学　3―0　富士大学
筑波大学　1―1　国士舘大学
東海大学　2―1　同志社大学

〔準々決勝戦〕

明治大学　4―0　福岡大学
近畿大学　2―2　日体大学
天理大学　5―0　日本大学
東海大学　4―1　筑波大学

〔準決勝戦〕

明治大学　3―3（内容勝）　近畿大学
東海大学　2―2（内容勝）　天理大学

〔決勝戦〕

明治大学　1―1（内容勝）　東海大学

秀島大介　引分　原口真次
松本昌広○　大外刈　北田晃三
大漉賢司　引分　中村佳央
吉田秀彦　引分　下出善紀
鉄谷竜三　優勢勝　○山田利彦
岡部善隆　引分　岩田佳司
佐々木伸也　引分　佐藤茂士

秀島と東海大主将原口の一戦は両者ともに組み手に厳しく、技が出ず双方に「指導」が

第40回全日本学生柔道優勝大会優勝で悲願の復活を果たす

与えられる。その後も同様の展開が続き、両者「注意」そして「警告」にまで及んだが結局引分け。松本対北田、決勝戦のポイントと見られたこの対戦。松本は序盤から左袖釣込腰、内股、小内刈と果敢に攻めるのに対し、守勢の北田に「指導」がつく。松本の出足払は北田体を捻りポイントにならない。なおも攻める松本の大外を北田タイミングよく返して「技有り」。東海応援団の気勢上るなか松本少しも焦らず、豪快な大外刈で逆転の一本勝ち。

大漉左、中村右のケンカ四つ。組手争いが続き両者「指導」「注意」と続く。中盤、中村得意の寝技勝負に出るが大漉は立って勝負、時間となり引分け。八二kgの吉田と一二六kgの下出、両校のポイントゲッター同士の対戦、ここも吉田左、下出右のケンカ組手、ともに慎重で「指導」まで行く。下出得意の内股を吉田体さばきよくかわしながら小内刈、体落を見せるが効果なく引分けに終る。ここも鉄谷の八〇kgに対し山田は一二五kg、しかし、前捌きのうまい鉄谷は前に出てつかまえようとする山田の出ばなを背負、袖釣込みでけん制し、鉄谷のペースを崩さない。しかし中盤山田の内股と見せての小外掛に崩れ、体を捻るも「有効」となる。

岡部、岩田はガッチリ組み合い、岡部は払腰、岩田は内股で序盤から激しい攻め合いを展開、終盤、岡部ややバテるが守り切る。

大将戦佐々木対佐藤、後のない東海、佐藤に望みを託すが、逆に佐々木が序盤から積極的に攻める。開始早々払腰で大きく崩すが有効には至らない。さらに佐々木はやわらかい巨体を利して内股、払腰、大外巻き込みと攻め、後半も焦った佐藤が掛けた小外刈りを巧みにかわして倒すなど終始試合を有利に進めて時間切れ。この瞬間、明治大学の十九年ぶり十三回目の優勝が決った。

明治悲願の復活を果した決勝戦の殊勲者は、「技有り」を先行されながら落着いて一本をとり返した松本であろうが、大将戦、同点内容勝ちを背負っての佐々木の戦いぶりも称賛に価する。「攻撃は最大の防ぎょなり」を地で見せてくれたが、本来このケースでは逆の展開になるのが普通である。十九年ぶりの優勝という重圧を跳除けた佐々木の気力は日頃の練習の裏づけがあっての事だろう。

優秀選手(関係分)

明治大学　吉田秀彦

松本昌広

全日本学生体重別選手権大会

10月5日　日本武道館

95kg超級

二位　松本昌広（明大）

講道館杯体重別大会（世界選手権第一次予選）

4月7日　講道館

78kg級

優勝　吉田秀彦（明大）

全日本新人体重別選手権大会

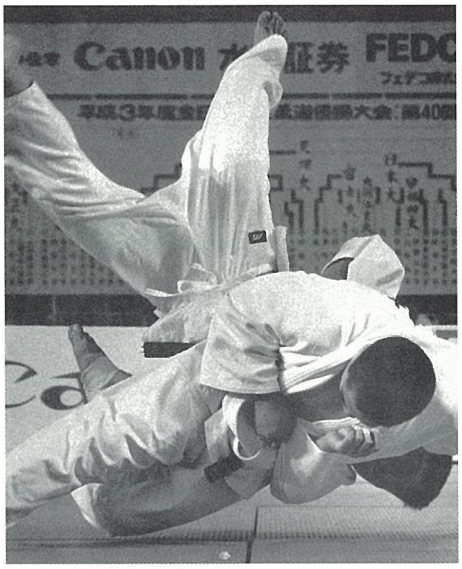
11月　福岡市民体育館

60kg級

優勝　園田隆二（明大）

78kg級

二位　鉄谷竜三（明大）



第40回全日本学生柔道優勝大会で東海大の北田をくだし、優勝を決めた松本の美技

全日本柔道選手権大会
4月29日　日本武道館

小川輝く三連覇、学生吉田三位

〔準決勝戦〕
小川直也（JRA）　崩上四方固　中谷　弘
金野　潤（日大）　優勢勝　吉田秀彦（明大）

〔決勝戦〕
小川直也（JRA）　優勢勝　金野　潤（日大）

全日本選手権大会出場者
小川直也、吉田秀彦、新垣修、正司直樹

世界柔道選手権大会
7月10～16日　スペイン

快挙、小川世界も三連覇

〔決勝戦〕
95kg超級
小川直也（日本）　横四方固　コゾロトフ（ソ連）

フランス国際クラブ対抗大会
11月3日　フランス・サンティチェン市

明大チーム三連覇

監督　重松裕之
関口敦士（軽）、鉄谷竜三（中）、松本昌広（重）

〔決勝戦〕
明治大学クラブ（日本）　2―0　ミュンヘン（ドイツ）

大会終了後フランスナショナルチームと合宿練習。

努力・結束・喜び

一九七四年度卒　原　吉実

厳しい稽古

昭和六十一（一九八六）年、助監督を引き受けるので暫くぶりに道場に行ったのだが、学生が皆寝っころがって挨拶するのを見て怒鳴りつけた。礼儀から教えねば、これは大変だ、並大抵ではないなと思った。やがて厳しい稽古に四年生が不満をあらわにした。新垣を除く四年生全員が稽古をボイコットした。私は稽古についてこられない者は道場に来なくてよい、三年生以下で頑張ろうという気持ちでやり始めた。

ボイコット事件があって以来、大黒柱をつくらねばと感じていた。誰かを先頭にし、明大柔道部を引っ張らせようと思った時、小川直也が現れた。私は小川を軸に中身の濃い稽古をする努力をした。

だが一度ついた怠け癖は簡単には治らなかった。緊張感を欠いた稽古が続いたある土曜日、学生と根競べをやることにした。午後一時から夜の七時頃まで黙ってじっと座っていた記憶がある。余りに長い稽古に何かを察し、学生達が必死になって稽古をやりだした。その時学生を集めて、私は互いに必死になり、けんか腰になるような真剣な稽古を望んでいることを伝えた。そのような稽古であれば三時間位で終わってしまうのだと言い聞かせた。

この頃から八幡山の合宿所に泊り込み、朝トレーニングをみっちり一時間やらせ、朝食後午前の授業のない学生を警視庁武道館に稽古に行かせた。午後は明治大学で三時間半みっちり稽古をさせ、稽古の後に筋力トレーニングをやらせた。八幡山での生活は約二年間続いた。

平成二（一九九〇）年監督就任早々、二年生の岡部善隆が合宿所から逃げ出した。数カ月して新潟でマネジャーの松島進治と一緒に善隆と会った。少し痩せていたので「いったいどんな生活をしていたのだ」と尋ねると、スキー場の食堂でアルバイトをしたが、どうしても腹がへるので客が注文した品を階段の下で食べ、それが発覚しクビになったと言う。いかにも大食漢の善隆らしい。それから新潟市内の工事現場で仕事をするまでの経緯を話してくれた。随分と心配したが、翌朝やっと東京へ無事連れ帰った。

稽古内容にも工夫を重ねた。選手を前に立たせ、残り全員と試合形式の稽古をやらせたりもした。全員から一本を取るまでは止めさせなかった。スタミナをつけるために一分間ぶっ続けで技を掛けさせる稽古を十セット程やらせ、終わったらすぐさま投込みをさせた。重量級であのスタミナをつけた小川には、あの稽古がプラスになったと自負している。当時は第一回目の稽古を三時半から六時半ころまで、授業が終わって道場に来た部員に第二回目の稽古として六時半から九時過ぎまでと、二回に分け稽古をした。

当時横浜から道場へ通ったが、三時～夜九時頃まで道場にいて、家に着くのが夜中の十一時である。それから夕食をとり次の朝は自分なりにトレーニングをやり、また三時ころには道場に行く生活が続いた。何度もこの生活が嫌になった。楽しみは選手が強くなることだけだった。教え子が多くの大会で優勝するとものすごく嬉しいが、それが終わると次の楽しみの為にまた苦労することの繰り返しだった。

平成三年は東京学生優勝大会ではボロ負け

をした。新たな気持ちで頑張ろうと、私を含め全員頭を丸めると言い残し帰宅した。翌日、お茶の水の床屋で頭を丸坊主にし道場に行ったら、学生が一人も道場に来なく驚いた。頭を刈るのが嫌だから皆道場に来なかったという。それなら自分達でやれ、私は明治の監督を辞める決意をした。二日後に学生全員が頭を丸め私の家に押しかけてきた。狭い部屋に当時主将の吉田、岡部、マネジャーの松嶋の三名が入り、大泣きして監督を続けて欲しいと懇願された。私はもうやりたくないと頑なに断ったが、さすがに大粒の涙を見てまた一から出直すことにした。翌日から以前より厳しい稽古をした。

全員一丸の闘争心

全日本学生優勝大会当日、学生は皆緊張していた。私は控え室で冗談をたくさん言って雰囲気を和らげようと努力した。結果は待望の十九年ぶり十三度目の優勝である。表彰式で優秀選手として松本と吉田が選ばれたが、私としては明治の選手全員に優秀選手賞をあげても良いと思った。全員が一丸となり必死になってやってくれた。全試合を通し逃げた試合が一つもなかったことに大満足した。翌年の大会も秀島大介が小柄ながら対戦した大男たちを試合場狭しと攻め立てた。彼の主将としての責任感、そして闘争心がチームを連覇へ導いたと思っている。

この優勝を陰になって支えてくれたのが、当時助監督の重松裕之だと思っている。私が監督をやるとき選手だけをみるから、選手以外はお前がみてくれと言った覚えがある。それを忠実に実行してくれた。さらに十九年ぶりの優勝は百瀬部長抜きでは成しえなかった。助監督・監督時代をとおし、百瀬部長には大変お世話になりました。

この経験で選手時代とは違った精神的な粘り強さが養われたと思っている。当時「努必達」という言葉を支えとしていた。稽古するものが一番強い、楽な稽古をするものはその程度にしかならないと今でも確信している。

雌伏の時代、復活優勝と連覇

一九八二年度卒　重松裕之

雌伏の時代

百年の長きにわたり伝統を積み上げてきた明大柔道部にも、戦績のうえにおいて苦難の時代がなかったわけではない。昭和四十七年に昭和最後の団体優勝を遂げて以降、同五十年代後半には、伝統校でありながら優勝候補の下馬評にもあがらない時代があった。

台頭著しいライバル校の多くは体育大学部を有していることなどもあり、柔道部の強化が学校による運営施策の一環として位置づけられ、あらゆる面でも強化体制が整備されていた。一方、明大柔道部では、部の活動経費は安定的とは言い難いOB会費によって支えられており、大学の体育推薦入試システムについても、そのハードル（学業成績、推薦枠等）は現実的なスカウト環境と乖離した厳しい状況にあった。

さて、困難な状況に直面した場合、一般的には、時代の流れに沿った新たな方向性を模索して行くこととなる。そもそも、大学スポーツにおいては、高い競技力を維持し、勝負に勝つことだけが唯一の目的でもなかろう。競技成績が落ち込んでも、誰かが生活に困窮するわけでもない。

困難な環境から身を引く理由は幾つもあった。しかし、明大柔道部の指導陣やOBの間では、そうした選択肢があることすら論じられなかった。困難な勝負に真正面から取り組むことしか考えなかったのである。

戦績の上では低迷期であったが、復活を、来るべき優勝の時を信じた「雌伏の時代」であったと言えよう。

低迷期の思い

しかし、当時の学生は、低迷する戦績のなかで悔しい思いを繰り返すことしか出来なかった。低迷期を作ってしまった当事者の一人として、ある年の納会での出来事が忘れられない。

当時は納会の最後に全員で部歌を斉唱するのが慣わしであった。

〽聞いてみたかヨ～、明大の柔道部、とどろく選手のその名を知るや、ヨイ、ヨイ…。

という部歌を歌い終わった時のことである。

「いったい、どこに、名前がとどろくような選手がおるんじゃ」

姿師範が苦渋に満ちた声でおっしゃった時には、まさしく情けなさと恥ずかしさで学生全員声もなかった。

部歌

明大柔道部の部歌は次のようなものであった。

聞いてみたかヨ明大の柔道部　ヨイヨイ
アリャヨイコリャヨイ
ヨイヤノヨイヨイ
轟く選手のその名を知るや　ヨイヨイ
アリャヨイコリャヨイ
ヨイヤノヨイヨイ

（作詞・作曲は昭和前期の部員であるが氏名は現在に伝わっていない）

復活への取り組み

当時の学生にも先輩達に負けない戦績を残したいとの思いはあり、稽古を怠っていたわけではない。個人大会ではそれなりの戦績も残している。

しかし、団体戦で優勝旗を掴むためには、柔道部活動体制の全般的な構造改善に取り組む必要があった。

入試システム改善

今現在でも母校に入学するためには柔道部からの推薦を得ても、相応の学業成績を有することが条件となるが、昭和五十年代後半頃には、ライバル他校と相対比較すると、求められる学業成績は大きく上昇し、学部ごとに体育会への理解度に差異があるため、推薦枠も少数に限定されるという厳しい環境下にあった。

優秀な素質を有した新人学生の確保に関しては、柔道部以外の体育会各部も大きな危機感を抱いていたことから、「母校発展に寄与した体育会の伝統維持」の思いを背景に、全体育会は一致して体育推薦入試制度の適正化に向けた活動を粘り強く展開してきた。

柔道部は、いち早くOB諸氏による学内関係者への働きかけを開始するなど常に中心的な役割を果たしてきたが、特に、柔道部長である百瀬教授は体育会全体の牽引役として積極的にこの問題に取り組まれてきた。

その結果、現在ではAO入試が導入されるなど、推薦入試制度の改善に大きな進展を見ることとなった。

財政基盤の強化

明大柔道部は創部以来、学校当局からの財政的支援をほとんど受けることなくOBをはじめとする各方面からの浄財に頼りながら活動していたが、当時のOB会費は財政的に安定しているとは言い難い状況にあった。

更には、学生の生活の場であり重要な修行の場でもある合宿所も、昭和五十六年にはOBの浄財により八幡山合宿所が設けられたが、目黒合宿所は老朽化のため自壊寸前の有様であった。

そこで、部運営の財政基盤確立については、神永昭夫先生の具体戦略と陣頭指揮により、OB会（以下、明柔会）の組織強化と財政基盤確立に取り組むこととなった。

まずは、全国OBの問題意識を喚起し情報を共有化する狙いから、昭和五十七年にはOB機関紙『明柔』（小林敏邦編集長）が再発刊され、同六十二年には濱本義典OBが明柔会事務局入り（平成元年から事務局長）、会計責任者に入江秀明OBが就任することとなり、明柔会費納入事務の改善（口座引落しシステム）に取り組み、財政基盤の安定化（潤沢とは言えないまでも）が実現した。

それまでも多くの先輩方が明柔会運営に汗を流してきたが、この昭和六十年頃から、明柔会は柔道部と表裏一体の組織として本格的に整備されたと言っても良いだろう。

こうした財政基盤強化の方向性は、その後、杉原構OB、細川隆夫OBを中心とした現在の奨学金委員会の発展と、目黒新合宿所の建設、山内鉄生OBの合宿所生活委員長にまで繋がる。

復活への手がかり

指導陣であった当時の関、篠巻、上村の歴代監督はサラリーマンとしての本業や全日本チームのコーチとして多忙ななか熱心に指導されていたが、学生達は長年優勝から遠ざかってしまったために優勝の体験がない学生ばかりとなり、優勝の美酒にたどり着くための具体的スキルを引き継ぐことが出来ず、美酒を飲めないことの言訳が幅を利かせるという、負のスパイラルに陥りつつあった。

負のスパイラルに陥りつつある組織の建て直しには、構造的な改善だけでなく、それまでの常識を打ち破る「現場意識の改革」が不可欠となる。

現場である駿河台の道場では、常識を破る「強烈な手がかり」を欲していた。つまり、常識外れの情熱と苛烈な指導力を持った現場指導者と、桁外れの素質を有した選手の存在である。

昭和六十二年、原吉実OB助監督が就任。同年、小川直也が入学する。

十九年ぶり復活優勝までの道程と連覇

原助監督となってから、道場での稽古風景は一変した。

小川が世界を制して以降は、原助監督と小川のマンツーマンによる厳しい稽古ばかりが注目を集めるようになるが、他の学生にも原イズムは浸透した。

戦績記録には名前が出ない学生部員のガンバリについては私が証人である。

姿師範が見守るなか、学生達は文字通り明けても暮れても猛稽古に励んだ。「試合が待ち遠しい」と当時の学生達は言ったものだが、「試合のほうが稽古よりぜんぜん楽だから」が本音だったようだ。そして、この意識は「あれだけ稽古したのだから負けるはずがない」との意識に昇華していく。こうなれば、好成績は後から付いてくる。

昭和六十二年から平成元年にかけて、新垣、天本、飛松、小川、石田、吉田、秀島が学生体重別で優勝するなど、学生チャンピオンを多数輩出し、団体優勝大会でも常に優勝を争うチームに成長した。

平成元年には当時最強と言われた東海大学に決勝戦において同点内容差で敗れはしたものの、悲願の復活優勝まであと一歩まで迫るところとなった。

私は、そうした完全復活への足掛かりが築かれつつあった平成二年に、原監督体制を支えるべく助監督となったが、平成三年には、指導者の端くれとして悲願の十九年ぶり団体優勝に立ち会うことができた。

十九年ぶりの優勝

平成三年の第四十回全日本学生柔道優勝大会は東海大学と決勝戦を争った。

明大チームは、吉田主将を中心に、根性の切り込み隊長・秀島、静かなファイター・大漉、ムードメーカーの荒法師・岡部、団体戦の得点王・松本、火の玉小僧・鉄谷、巨岩の切り札・佐々木のメンバーで戦った。薄氷を踏む思いでの優勝であったが、学生達は全力を出し切った。

優勝の瞬間、原監督とガッチリと抱き合って涙したことは一生の思い出であるが、この優勝の直前にもドラマがあった。

全日本団体優勝大会の前哨戦となる東京学生大会には吉田、秀島両君を怪我で欠いた出場となったが、結果、準決勝で日大と対戦し代表戦で敗れた。

ポイントゲッターを欠いた状態では致し方ない成績と思われたが、全日本を前に気合を入れ直すために、「頭をボウズ刈りにする、しない」という、今思えば次元の低いことで学生達との間がこじれてしまった。こうした際こそ、助監督として私の働きぶりが問われるところだが、力量不足。今となっては笑い話のようだが、その時は、明大柔道部存亡の危機とまで思い詰めた。

試合まで一週間を切った頃だったと記憶するが、何と、姿師範が自ら頭を丸めて道場に見えられた。

「ボウズ頭は兵隊以来じゃよ」、と頭を一撫でされた師範を前に、われわれは自分達の幼さ、至らなさに泣くしかなかった。

この「事件」により最強の結束力を得たチームで十九年ぶり悲願の優勝を遂げたのである（よって、優勝写真は全員ボウズ頭で収まることと相成った次第）。

連　覇

悲願の復活優勝を成し得た翌年、明大柔道部は連覇を成し遂げた。

ライバル校が巻き返しに掛ける思いは相当強く、冷静な戦力分析でも厳しい戦いを強いられるのは明白であった。当時、神永先生が原監督に対し、「一度の優勝で満足してはだめだ。連覇してこそ真の王者だ」と話されていたが、連覇の困難性を承知されているからこその激励であったと思う。

原監督も私も「恥ずかしくない戦いはしてくれるハズ」との確信は持っており、吉田、岡部が卒業で抜けた穴は、執念の業師・山本、意外性の男・中嶋、の柳川コンビが埋めることとなったが、少数部員での連覇は至難の技であろうと覚悟していたのも本音である。

ところが、学生達の意識は私達の想像を超えて逞しく成長していた。楽な戦いではなかったが、自信と気迫に溢れた堂々とした姿勢で試合に臨み、良い意味で相手を呑んだ戦いぶりが印象的な優勝であった。

第41回全日本学生柔道優勝大会
11月7・8日　大阪府立体育館

明治輝く連覇！

逆転で東海大を下す。明治が二年連続十四回目の学生王座に輝いた。

二年連続で同じ顔合せとなった決勝戦は東海が三将岩田の技有りで先行し優位に立ったが、明治は続く松本が有効ポイントを先行される劣勢から奮気左内股一本勝ちで逆転し連覇を達成した。

〔決勝戦〕

明治大学　1―1（内容勝）　東海大学

佐々木伸也　両者反則負　野瀬
鉄谷竜三　引分　生駒
秀島大介　引分　窪田
大瀧賢司　引分　中村
中嶋和也　優勢負　○岩田
松本昌広○　内股　松村
山本兼治　引分　北田

2年連続で学生王座に輝いた明大チーム

佐々木―野瀬

佐々木は払巻一辺倒から脱け出し最近進境著しい。対する野瀬は本年度九五kgの学生チャンピオン。互いに右組みで引き手の取り合いとなる。先鋒のかたさもあって双方同じパターンから抜け出せず四分すぎ双方反則負けとなる。

鉄谷―生駒

ここは体格差からいって生駒がとりに出る場面、しかし、鉄谷は先手先手と攻めて生駒の組手を封じむしろ鉄谷の流れのなかで引分けとなる。五分間攻めきれる軽量鉄谷のスタミナは日頃の稽古量から。

秀島―窪田

明大主将秀島は鉄谷の一階級下七二kg級の選手、しかし、大型を苦にしない実力者。対する窪田は一年生ながら昨年のインターハイ九五kgのチャンピオンで本大会の調子は抜群、周囲はこの対戦がヤマの一つと見ていたようだ。

身長二〇㎝、体重四〇kgの体格差を意に介せず秀島は組んでいく。前の二試合とちがい双方右のガップリとなる勝負となった。秀島は右背負、小内刈、左袖釣込腰でリズミカルに攻める。また窪田の大外刈に対しすくい投げで応じる。窪田は大外刈、払腰、大内刈と